

Contents

「小さな希望と大きな課題」.....	1
ふれいす東京 ボランティア感謝会 開催!.....	2
企画展「OUR DAYS DIARY x DISHES」.....	4
ネストより「専門家と話そうシリーズ」第3弾.....	5
セミナー「オトナの女的 カラダとの上手な付き合い方」..	6
第21回日本エイズ学会学術集会 参加感想文.....	7
活動報告(2007年10~12月).....	8

「小さな希望と大きな課題」

宮田 一雄

国連合同エイズ計画(UNAIDS)と世界保健機関(WHO)は毎年世界エイズデーの前に報告書『HIV/AIDS最新情報』を発表し、その年の年末現在の推計結果を明らかにします。2007年版推計は別表の通りで、前年の06年版と比べ、HIV陽性者数も新規感染者数もエイズによる死者数も大幅に下方修正されています。

これは主にサハラ以南のアフリカ諸国やインドで推計方法が改善された結果だそうなので、この下方修正によってただちに流行が縮小に向かったと判断することはできません。

ただし、07年版報告は、新しい推計法で過去の新規感染件数も計算し直し、「HIVの新規感染は1990年代末にピークに達し、以後は緩やかに減少している」と結論付けています。世界のHIV感染は拡大を続けてきたとするこれまでの報告とは明らかに異なる記述であり、エイズの流行に対する認識の大転換が示されたといえるでしょう。エイズ対策に取り組んできた人たちは、この大転換をどう受け止めたのでしょうか。

報告書を受けて日本のエイズNGOグループは11月26日、厚生労働省で記者会見を行い、ふれいす東京の理事でもあるAIDS&Society研究会議の樽井正義副代表(慶應義塾大学教授)が「私たちはいま、小さな希望と大きな課題に直面している」と次のように語りました。

「長らく世界が取り組んできた努力がわずかながらも効いてきた。少なくともそういうことはいえるのではないか」

これが「小さな希望」です。一方の「大きな課題」はもちろんです。その希望が世界の趨勢となるよう努力を続けていくことであり、それを怠って「やれやれ」と安心してしまえば、流行は再び増加に転じることになるでしょう。

国際エイズ学会(IAS)のクレイグ・マクア事務局長は12月4日、東京・内幸町の日本記者クラブで記者会見し、「HIVに感染して生きる人の数がこれまで考えられていたより少なかったという点ではグッドニュースだが、流行が縮小に向かっていると考えるのは早計だ」と述べています。

マクア事務局長によると、世界のエイズの流行は(1)

サハラ以南のアフリカ(2)その他の地域、の異なる2つの流行としてとらえる必要があります。前者は社会全体に広がった流行(Generalized Epidemic)であり、後者はその前段階ともいえる局限流行期(Concentrated Epidemic)つまり「セックスワーカー、男性とセックスをする男性(MSM)、薬物注射使用者(IDU)」などHIV感染のリスクにさらされやすい特定の集団に感染が集中的に広がる段階です。

HIV感染のリスクにさらされた集団の内部で、積極的に感染の予防や感染した人々への支援に取り組めなければ、局限流行期の感染の拡大を止めることはできません。しかし、そうした考え方は社会の多数派を形成する人々にはなかなか受け入れられないこともしばしば指摘されています。エイズ対策が偏見や差別との闘いを重視するのもそのためです。

HIVの新規感染の減少傾向は実は、サハラ以南のアフリカの趨勢を反映したもので、局限流行期にある地域の流行に縮小の兆候は見えていません。アフリカの現状にしてもごくささやかな成果が見えてきた程度です。

今年は5月に横浜の第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)、7月には北海道洞爺湖サミットが予定されており、国際保健問題が地球温暖化対策と並ぶ重要課題として浮上しています。しかし、途上国の保健基盤全体の強化が強調される反面、エイズを中心とした感染症対策に対する注目度は低下している印象も受けます。四半世紀に及ぶエイズとの困難な闘いの中で、ようやく見え始めたささやかな成果。その希望のメッセージを各国指導者はどう受け止めるか。万が一、読み違えるようなことがあれば、世界のエイズの流行は再び拡大軌道をたどることになるでしょう。

表 HIV / エイズ最新推計

	2007年版	2006年版
HIV陽性者数	3320万人	3950万人
年間新規HIV感染者数	250万人	430万人
エイズによる年間死者数	210万人	290万人

ぶれいす東京 ボランティア感謝会 開催!

ボランティアの活動に感謝の意を表す会が、11月22日に、ねぎし内科診療所の多目的室にて行われました。



感謝状についで花束を受けとる石崎さん(左)



感謝状を手に記念撮影



理事の根岸さん(左)とパディの花房さん

ぶれいす東京の活動を永年にわたりボランティアとして支えてくださっている方々の労に対し、感謝の意を表す会が開催されました。10年以上ボランティアとして活動している10名の皆さんに感謝状と花束を送り、部門を越えて交流できる機会としてささやかなティーパーティも行われました。ベテランボランティアの味のあるコメントや、笑顔と温かい雰囲気満ちた会となりました。

多くのボランティアの皆さんを代表して、以下10名の方々に感謝状を贈呈しました。この場を借りてあらためて感謝の意を表したいと思います。

- 足立惟子さん(ホットライン部門)
- 荒木ひで子さん(パディ部門)
- 井口頼子さん(パディ部門)
- 石崎眞子さん(パディ部門)
- 九岡美知子さん(パディ部門)
- 澤地徳男さん(事務総務部門)
- 花房博夫さん(パディ部門)
- 深見籠子さん(ホットライン部門)
- FRさん(Gay Friends for AIDS)
- 山里さん(ホットライン部門)

永年ボランティアの方々より

「ボランティア感謝会で感謝の気持ちに気づいた」

CUOCA

ボランティア感謝会で、10年以上活動している人達にお会いして、懐かしく、部門が違ってても、続けてきたということで通じ合うものがありました。

私は12年前にぶれいす東京に入り、主にパディをやってきました。初めの2年位は、HIV/AIDSの状況も今とは違って、薬がなく、発症すると亡くなっていく方がほとんどでした。辛い気持ちを日常の中では家族にもしゃべれないので、定例のミーティングを待ちかねるように毎回出席して、心を落ちつけていました。先輩パディから経験を聞いたり、プライバシー尊重のことなどを厳しく言われ、身の引きしめる思いをしたことを覚えています。

それでも、この病気がなければお会いすることもなかった方達とお会いできて、親しく、思い出深い時間を過ごせたことは、ありがたいことでした。

クライアントさんに感謝!!

パディの仲間の皆さんに感謝!!

又、池上さん、生島さんはじめ事務所のスタッフの皆様、特に現パディコーディネーターの牧原さんには大変感謝しています。

ぶれいす東京の多様性を包み込む雰囲気(セクシャリティのことばかりでなく)が、私には居心地がよく、こんなに長く続けてこられました。自分は自分のままでいい、無理せず自分のやり方で...(その為に、ご迷惑をかけているのかもしれませんが)いろいろな人がいろいろな役目で出入りし、大勢の人で成り立っているぶれいす東京に感謝です。

年々の老化には勝てませんが、自分の健康もどうにか維持できていることにも感謝。

ボランティア感謝会は、今までこうした大勢の方々のおかげで続けてこられたんだな〜ということに気付かせて頂くよい機会となりました。ありがとうございました。

『宝の時間』この10年」 ホットライン 足立惟子

去る11月22日ピカピカのねぎし内科診療所にて第1回のボランティア感謝会が行われました。私も対象者と同じ、思いもよらぬことでビックリいたしました。と申しますのは、この2年ほど体調不良にて活動をお休みしておりましたので資格外では?と、内心思いましたがおまけで仲間入りさせて頂いたと、勝手に解釈しております。

理事の根岸先生より感謝状を、宮田さんより愛らしいブーケを、にこやかに頂きました。いつものぶれいす東京らしい手作りのパーティで、こじんまりとした中にも温かみのもった優しい思いと心があふれておりました。

ぶれいすとの出会いは、私は90年に大きな病を体験、その後気持ちの整理がつかない日々を過ごしまして、何か新しい事に挑戦する気が起きた頃、忘れもしない96年夏、チャンスが来ました。

小さな小さな3センチ四方の新聞記事「ボランティアス



ホットラインの深見さん（左）と足立さん



会計の澤地さん

「スタッフ募集」に引き付けられ、HIVも電話相談も何も知らないまま飛び込みました。事務所に初めて伺った印象は、強烈に残っています。強いて表現するならば、「つかみどころのない不思議な空間」だったのです。

研修を重ねるごとにボロボロ鱗が落ち、ふーん、なるほど、そうなんだ！！と、ぶれいす風味の私が少しずつ出来上がっていった気がします。当時のシフトもぎりぎりの状態で研修終了後はすぐに回線1本を任されたものです。冷や汗と脂汗にまみれつつも1本1本の電話を丁寧に受けてゆく毎に、相談者の気持ちや心の揺れ、不安に寄り添う意味等、ぼんやりとつかめてくるようになりました。

経験を何年積みましても、何本受けましても、これでよかったのかしらと振り返る日々でした。なによりも「電話を利用してよかった」と相談者に感じていただけるように、この点だけは心がけてきたつもりです。

過ぎてみればあつという間のような気もいたしますが、家庭以外に「私らしさ」をだせる場所にめぐり会い、たくさんの仲間が出来、楽しく充実した日々でした。また、この10年は味わい深くもあり、中身の濃い時間でもありました。社会活動を通して、大きな宝物を授けていただいたものと感じております。

続けられた基にありますものは、代表がいつもおっしゃる「ドロボーが居ても分からない」この温かい「摩訶不思議な空間」の居心地の良さでした。池上さん、生島さん、事務所のスタッフの皆様に私のほうから感謝状を差し上げたい思いです。

またいつか、活動を再開する日が来ます事を念じつつ、今しばらく冬眠をいたします。

「自分探しの旅かもしれないね」

FR

タイトルは、お気に入りのアーティストの歌から拝借した

一節である。詞の文脈とはかなり異なるが、私にとってのぶれいす東京との関わりを表現しようと思うと、必ずこのフレーズが頭に浮かぶ。

きっかけは、ゲイ向けのHIV啓発・支援活動を立ち上げるから一緒にやってみないかという、友人からの電話だった。時は1990年代前半。ゲイの端くれとして決して他人事とは思えず、また尊敬するマジック・ジョンソンの衝撃的な現役引退などもあり、それなりに関心を持って考えていた頃だった。

Gフレ発足当初は、活動を軌道に乗せるべく試行錯誤の繰り返しだった。相談電話を開設するためにフリーマーケットでその費用を捻出したことも、懐かしい思い出。やがて、新たな人材がGフレに続々と現れプロジェクトなどに活躍するようになり、仕事が忙しくなったこともあって、今ではGフレ電話相談に月に一度入るのがせいぜいだ。

電話相談という活動は、姿の見えない相手の悩みや苦しみを解決したり和らげたりする糸口を一緒に探っていく。その手伝いをする中で、「自分自身はどうなのか」という問いかけの姿勢を養うことができたと思う。また、ぶれいす東京には一つの大きな目的のもとに多種多彩な人々が集っている。自分が自分であることを憚ることなく様々な人達と触れ合える場は、心の支えにもなっている。活動や仲間との交流は、自分らしさを探す「旅」の道標のようなものかもしれない。ぶれいす東京のコンセプト「自分らしく生きること、応援します」は、私にとっての応援歌でもあると実感する。

この度、十余年のボランティア活動に対する感謝状の贈呈という栄誉を賜ったが、お世辞にも感謝されるほどの貢献をしてきたとは言えず、むしろ私からぶれいす東京に多大なる感謝の意を表したい。そして今後もできる限り「自分探しの旅」を続けつつ、ぶれいす東京と関わっていければと思っている。



生島さん（左）とパディの荒木さん



ベテランパディのみなさん。左から花房さん、荒木さん、池上代表とGフレのFRさん、九岡さん、石崎さん



企画展「OUR DAYS DIARY×DISHES」

Gay Friends for AIDS では、12月1日～16日に新宿二丁目コミュニティーセンター akta で日記を題材にした企画展「OUR DAYS DIARY」を開催、また同じく新宿二丁目の CoCoLo cafe にて食卓を題材にした「OUR DAYS DISHES」を12月中1ヶ月にわたって開催しました。

「OUR DAYS DIARY × DISHES 報告」

「DIARY」は最終的に21名の日記をパネル形式で展示しました。何気ない日常のワンシーンが綴られた日記と画像、そこにHIVのステイタスが+/-/?のいずれかで示されています。見に来られた方からはステイタスを見なければ誰が陽性者で誰がそうでないかわからない、という言葉が聞かれ、陽性者の存在が決して遠いものではない、自分の暮らしている街にもいるんじゃないかな、そんな感覚を持っていただけのように思います。

「DISHES」ではカフェスタッフの皆さんに協力いただき、会期後半にはパネル展示に加えてランチョンシートもOUR DAYS仕様に。展示された食卓の写真はコンビニ弁当から豪華な食卓、また病院食もありました。手記のパネルや冊子の配布

を併せて行いましたが、これまでの啓発イベントとはまさに“一味”違ったものになったのではないかと思います。

今回、同時期にLiving Together 計画とTOKYO FMのコラボレーションによるイベントがあり、合同でフライヤーを制作しました。夏の企画展に比べかなり多くの方に見ただけだと思います。また着眼点として面白いという声もあり、Gフレでは継続的なプロジェクト化を予定しています。(sakura)

「OUR DAYS DIARY 展を見て」

自分は、陽性者の立場で参加させてもらっていたので、他の皆さんがはたしてどのような内容で、日記を書かれているのだろうという興味で会場へ向かいました。

会場に展示されていた「日常」が、僕の心に深く刻んだのは、同性愛者として、社会や家族との折り合いをつけながら、自分のセクシャリティを生きる幸せを必死に実現しようとしている姿でした。

そしてHIVに感染したことは、その実現の過程の中で、乗り越えなければならぬ問題の一つに過ぎないこと。もちろん、そのハードルの高さの感じ方は人それぞれであるけれど、僕らには、HIVを乗り越えることは、たいした問題ではなく、大切なのは、その先にある「生き方」。



「OUR DAYS DISHES」が行われた CoCoLo cafe (入り口)

感染した人も、していない人も、不明な人も、すでに、いろんな苦労や楽しみを抱えて生きている。そんな僕らにとって、HIVが乗り越えられないハードルのはずがないじゃないか!...そんな印象を強く持ちました。

そして、この展示が、多くの人々の目に触れ、参加が広がっていけば、「生きること」の大切さとHIVへの理解が、さらに深まるはずです。(kumazzzo)

「OUR DAYS DISHES」



「DISHES」に提供された料理のごく一部をご覧ください!

晩ご飯の写真を撮るために取材にあてられたのは4日間。

夕食をそのままリアルに撮りたいということで、夕方から夜遅くまで、都内の西から東へ。駆け足でしたがカメラマンの杉田さんと二人、大きなカメラを担いで、いろんな人の家を訪ねる取材はとても楽しいものでした。なんとと言っても、人の家にお邪魔するのはそれだけで面白い。

広い東京の街、普段ならまず行くことがない各駅停車の駅に降りるだけで、ちょっと興奮しました。ドアの向こうに広がる、住む人それぞれの個性がじんわりと反映されている部屋の様子は、できるなら、それも写真に撮ってたくさん並べてみたくなるほど、味わいがあって興味が尽きませんでした。

仕事場や病院、さらにはカップルで暮らすスイートホームなど、プライベートな空間に僕らを招き入れてくださった撮影協力者のみなさんには本当に感謝しています。

なんとと言っても一番嬉しかったのが、写真を撮ったあとに、食卓で一緒にいただいた晩ご飯! みんな料理が上手なんですもの。普段は、外食するか、買ってきてひとりで食べるのが習慣になってしまった僕には、台所でちゃんと作ったご飯を、食卓で、誰かと向かいあひながら、おしゃべりしながら食べることが、こんなにいいものなんだって! という、当たり前の幸せを改めて噛みしめる機会にもなりました。

カメラマンの杉田さんとも、「この企画、4日間とは言わず、1年くらいかけてやり続けたいねえ」と意見が一致して、取材が終わる頃には、とても名残惜しい気持ちになったのは、言うまでもありません。取材に伺わせていただいたみなさま、ご馳走さまでした、本当にありがとうございました。(かたみ)



「OUR DAYS DIARY」@aktaにて



たくさんの「DIARY」のパネル

ネストより “ 専門家と話そうシリーズ ” 第3弾

「開業医と話そう」

HIVをとりまくさまざまな専門家を招いてお話しいただくこのシリーズの第3回目「開業医と話そう」が10月23日にネストで行われました。

今回のゲスト根岸昌功さんは、2006年まで都立駒込病院の感染症科部長として日本でもっとも長くHIV診療をしてきた医師の1人。前職を退任して2007年の2月にHIV診療のできるクリニック「ねぎし内科診療所」をオープンして半年たった時点でのお話を伺いました。後半は参加者からのたくさんの質問にひとつひとつ丁寧に熱く答えていただき、充実した会となりました。(矢島)

「参加感想文」

ペンネーム 咲楽

今回、初めてネストにて開催の『専門家と話そう～根岸Dr.』に参加させてもらいました。私は2007年4月に感染の告知を受けて、月に1度地方の拠点病院に通っている未投薬の者です。告知を受けてから、ずいぶん悩み苦しみました。半年を経てようやく病気に向かう心構えができたので、意を決しての参加でした。

なにぶん、地方の拠点病院での受診のため、受けることのできる医療に差があるのではないかと、それを聞くため参加させていただいたのですが、ネギシ Dr. より『医療(技)自体、地方も都会も差がある訳でない』という話を聞き、とても安心できました。また、『Dr.を育てていくのは患者であり、HIVに係る症例が多いのは都会。ぜひとも色々な質問を主治医にぶつけて育てて下さい。』とのことでした。

告知を受けた以上、病気について真摯に受け止め、前向きに勉強する必要があるのだと感じることができた機会でした。遠方からですが、また機会を見つけこのような勉強会に参加したいと思います。

「『開業医と話そう』根岸昌功先生のお話を聞いて」

ペンネーム：冬

「病気を見ずに人を見る」が根岸先生がご自分のクリニックを開業するに至った大きな理由だと伺った。その言葉通りの病院作りを目指していらっしゃるようにお見受けし、会合に参加できたことを嬉しく思う。

担当医以外の意見を聞くことは大変勉強になる。根岸先生は技術的および心理的の両方の質問に非常に率直に答えてくださった。また処方箋は出すが薬そのものは契約した外の薬局で受け取らねばならないなど、拠点病院にはあって根岸先生のクリニックには提供出来ない部分も明確にしてください。しかし週末も開業しているので通院のために会社を休む必要はなく、クリニックで処置できない場合は慶応大学などに紹介して下さるそうだ。どちらをいいとするかは個人差があるが、自分のライフスタイルに合わせて病院を選べるオプションを作ったこと自体が、すでに先生のクリニック開業の意義に適っていると思う。



参加者の質問にひとつひとつ丁寧に答える根岸さん

拠点病院の先生方は次から次へと診療をこなしている様子が伝わり、患者側も病気に対する療法以外の話を医師が聞いてくれるという期待は抱いていないと思う。しかし慢性病を抱える病人が前向きに生きてゆくには、その病気をどのように人生に取り入れるか、がとても大きなテーマであり、「病気」が、ではなく「自分」が人生の舵をとっているのだ、という意気込みを持てるようになるまでが、長い道のりなのである。HIVと共存していけるようになることは簡単ではない。この心のケアの部分を大病院の医師に求めることは難しく思うのだ。

根岸先生のクリニックはただ話を聞いてくれ、定期的にお酒持ちよりの交流会を開くといった「長屋的」な病院を目指しているらしい。これは心強いことだ。町のお医者さんにHIVの診療を診てもらおうことで拠点病院に通院する「大げさ」さが気軽なものになるという期待も持った。HIV以外の町の診療所が日常的に扱う病気、ただ風邪を引いただの、おなか痛いだのといったものを診てもらおう近隣の患者も根岸クリニックを訪れる。たったそれだけのことがHIVという病気を心理的に「軽い」ものにし、我々の心を徐々に明るく(すでに明るい人はさらに明るく)してくれるのではないかと感じた。

ただ根岸先生のお話でびっくりしたのはHIV患者を診るといったら不動産のオーナーが断ったという話だ。また悪性リンパ腫はHIV病状が安定しても発症する油断ならない病気らしい。この話を聞いて部屋は一瞬しんと黙ってしまった。やはりどんなに治療法が進歩したとしても我々は怖い病気のひとつに冒されているのだな、と改めて思った。

しかしその後の根岸先生の言葉に励まされた。「たかが病気」であるという言葉だ。誤解を恐れずに言ってくださった言葉だ。そして病気になって得る財産は「勇気」であり、医師の心を突き動かしているものは使命感ではなく、その患者の「勇気」だとおっしゃっていた。とても嬉しい一言だった。その帰り道「たかが病気」をスローガンに、気楽に、そして逞しく生きていくことで、私のHIV人生を輝くものにしよう、と思った。

セミナー「オトナの女的 カラダとの上手な付き合い方」

10月6日(土)に、池袋保健所1Fに設置された東京都エイズ対策係が主催するエイズ啓発拠点の「ふぉー・てぃー」で、大人が PEPが、大人の女性を対象としたセクシュアルヘルスに関するセミナー「オトナの女的 カラダとの上手な付き合い方」を開催しました。

「オトナの女的...」

いみ

若者向け啓発活動をメインとしているが PEPを引退して、ぶれいす同期のともちゃんとみずの3人で同世代の女性向けの活動をしよう企画した第一弾のイベント。いみ的にはかなり満足な出来となりました。

参加者の約6割が私たちのターゲットの25歳~35歳で、ちゃんと定員の20名も集まったし、これまで3人プラス講師の兵藤智佳さんで練り上げてきたワークショップの内容も、思った以上に盛り上がり過ぎてひと安心。やっぱり20代~30代というのは、ティーンズとは違って、自分のカラダに対する意識が強いことを再認識しました。

第1部の対馬先生

の『女性のカラダの仕組みとケア』の講演もパワーポイントを使ってわかりやすく説明して頂き、この歳になってから月経の仕組みを改めて勉強。カラダとココロと女性ホルモンの関係、



第1部の講師：対馬ルリ子さん

知ってるつもりでも知らないことだらけでした。質問コーナーも念のためにサクラを仕込んでおいたけど、そんなの必要ないくらいにパンパン手があがって、30分じゃ足りないくらいでした。

第2部のワークショップは、いみが担当した、自分の星座をジェスチャーで表して順番に並ぶアイスブレイキングが盛り上がりなかったらどうしようかと心配してたけど、これが意外にみんな盛り上がり過ぎてよかった！寸前にワークショップの手法が智佳さんとのミーティングで急遽変わったり、おまけに何年振りかのファシリテーターだったから、うまくやれるのかも心配だったけど、参加者のレベルが高く、意見もいっぱい出だし、やり易かったです。

ワークの内容は、「オトナの女が婦人科検診へ行けない理由をライフスタイルごとに考える」。どういう女性のカテゴリーがあるかを考えて出してもらい、それを大きく分類、その中から一番ライフスタイルが違うと思われる「専業主婦」「ハケン社員」「正社員」の3つのカテゴリーに分け、それぞれが婦人科へ行けない理由をグループワークで考えてみました。でもそれぞれ特有の理由を出すよりは、実は共通の理由を出す方が簡単で沢山出たりして、オトナの女が婦人科へ行けない理由は「社会的な背景」と「個人的背景」に分かれてあって、それはライフスタイルに関係なく共通することで、また男にはない女性特有の理由もあるんだよ、ってことへの気づきがありました。

グループワークの発表をしてくれた各グループの代表者も素晴らしい発表をしてくれたし、講師の智佳さんのワークを進行し、まとめる力はやっぱりプロだと感心しました。最後

のまとめは後ろから見ていたけど、智佳さんが話している時に、参加者がみんな大きくなずいているのを見て、すごく嬉しかったです。3人で企画を練っている時に、参加者が「今日参加してよかった、楽しかった」って思えるには、「自分の気持ちシェアできた」「共感できた」「自分だけじゃなくて他の人も同じなんだ」という気持ちになることが大事って話していただけて、それが初めて実感できた瞬間でした。



セミナーの企画・スタッフをつとめた3人

最後、参加者とスタッフと講師全員が輪になって座って一人一人ふりかえりということを感じを一言ずつ言ってもらったときは、一体感があつたし、みんなが楽しんでくれたのがわかって、嬉しかったです。また参加者アンケートを見ても、80%以上の人が「満足した」と回答してくれていたの、これからもオトナの女のためのイベントを企画して行きたいなってすごく思いました。

最後に、参加者とスタッフと講師全員が輪になって座って一人一人ふりかえりということを感じを一言ずつ言ってもらったときは、一体感があつたし、みんなが楽しんでくれたのがわかって、嬉しかったです。また参加者アンケートを見ても、80%以上の人が「満足した」と回答してくれていたの、これからもオトナの女のためのイベントを企画して行きたいなってすごく思いました。

参加者感想文

「カラダについてもっと語りたい」

眞山

理解しているつもりでいたカラダの仕組みだが、おさらいすることで発見もあり、違った視点からカラダを見つめ直すことができ有意義だった。ちなみに私の唯一の自慢は健診を欠かさないこと。自営業ゆえお腹での健診は痛い健康には変えられない。大人にとって定期的な健診はたしなみのうちだろう。ところが、健診の重要性は理解しつつも、受診を後回しにしてしまう女性が多いという。

第二部のワークショップでは、主婦、フリーター・派遣、正社員という3つのライフスタイルに分け、それぞれが婦人科健診に行かない理由を参加者全員で探った。結論もさることながら、性をオープンに語る雰囲気心地よく、性に対していろいろ考え方があることに気がつかせてくれた。私自身も自分のカラダのことや、カラダに対する考え方を他人に語ったのは初めてのこともかもしれない。これからは語っていききたい。良い機会をありがとうございました。



第2部 ワークショップ

第21回日本エイズ学会学術集会 参加感想文

「第21回日本エイズ学会学術集会に参加して」

福原 寿弥

そういえば、一年前は東京、竹橋の日本教育会館で、我々ぶれいす東京の池上が会長を務めた日本エイズ学会学術集会。会場係をしていたあの時から早一年。ひとりの力も合わされば、いろんな事ができるって実感できた有意義な日々でした。そして、バトンは広島に…。

快晴とはいえないまでも、まずまずの学会日和。第21回の学術集会は、広島大学病院輸血部の高田昇会長のもと、「Step up! 情報と教育」というテーマで、11月28日(水)から30日(金)の三日間、広島国際会議場で開催されました。

ぶれいす関連では池上、生島が一般口演の座長を務め、さらには生島、牧原など数名が「陽性者支援」というセッションで一般口演を行いました。陽性者の就労等相談内容のまとめや、新陽性者ピア・グループ・ミーティング参加者の背景など、日頃の活動を通してこそ得られる内容の発表でした。また、私も「HIV検査・相談」というセッションで、「HIV陽性者やその周囲の人への相談サービスにおける新規相談の分析 - 陽性告知前後、及び確認検査前の相談について - 」という発表を行いました。長い題名ですが、要するに陽性告知前後の相談・支援態勢作りはとっても重要！という訴えかけでした。

いくつかのシンポジウムで「ぶれいす東京」の名を見かけましたが、そのうち生島さんが特別発言を行ったものも検査・相談がテーマでした。抗体検査を行っている保健所、検査所、クリニック、拠点病院などの現状が報告されましたが、特に地方の拠点病院における、地域に根ざした活動の話には、ひどく感嘆させられました。

そんななか、皮膚科クリニックなど、感染に気づかぬままHIV陽性者の診療を行っていることが多いかも知れない一般医療機関での、抗体検査の推進といった話題が出ました。また、毎年恒例「治療の手引き」、いわゆるガイドライン改訂に係るセミナー(今回は参加者440人だとか)においても、アメリカCDCの検査勧告の紹介がありました。HIV検査を行う事を知らせた後、本人が断らない限り、全ての医療機関受診機会において検査する事を推奨する云々...(詳しくは厚労科研・研究班報告を)。日本にそのまま当てはめるには検討の余地ありとの見解でしたが、総じて日々患者さんの診療に奮闘しているお医者さんの中には、「いきなりエイズ」の減少や感染拡大阻止といった早期発見のメリットを強調される方がいらっしやるようでした。確かに、きちんと医療を提供して下さっている医療機関の方々には、当然の想いかも知れませんが、しかし、我々に寄せられる相談を通してみると、現実に起きている、信じられないお粗末な対応が、告知前後の方を相当に痛めつけ、医療不信につなげていたりするのです。そういった方々を支援する環境が、地域レベルで整ってこそこの話だ！という強い印象を持ちました。

その他、学会期間中に見聞きした言葉の中に、いくつか気

になるものがありました。ひとつは「薬物」、いわゆる依存・乱用についてです。心・身・生活、いろいろな面でHIVとより密接につながってきています。今後とも、その動向に注意が欠かせない状況と思われました。また、「パートナーマネジメント」という、米国等で使われているらしい言葉にも出会いました。その表現が適切なのか？といった質問も出ていましたが、あまり触れられてこなかった視点なのかも知れません。そして、「ダルナビル」という新しいプロテアーゼ阻害剤の承認など、最新の知見に触れることもできました。

さて二日目の朝、眠い目を無理矢理開いて教育講演に参加しました。HIV複製に関連した蛋白とその活性を阻止する宿主因子の研究(!?)が、治療戦略のひとつとなりうるという話の後、全く同じ会場で、自立支援医療についての講義があり、今更ながらにこの学会の守備範囲の広さを感じました。分子レベルの視点から社会生活のシステムまで、一瞬、銀河を越えてワープする感覚におそわれました。

始めにも触れたように、昨年は運営側としても参加したわけですが、今回はそういった緊張感から解放されていたせいか、生島さんは咳、牧原さんはのど、私は鼻と、相談員三人、風邪薬のCM状態でした。それでもいろいろな情報や意見に触れて、エネルギー充電完了といったところです。

「刺激になったエイズ学会学術集会」

うみ

感染告知を受けて4年がたつ。しかし、まだ服薬も開始しておらず、これといった症状もないため、「まあ、大したことじゃないだろう」とのんきに構えているところがある。未だ自分が本当に感染しているのか、疑ってしまうことすらあるくらいだ。

今回、初めて日本エイズ学会学術集会に参加して、感染後すぐに薬を飲まなくてもよいと医者が判断するようになったことや、「HIV・エイズ=死の病」と考える風潮が弱くなってきたことが、つい最近の出来事だということが分かり驚いた。ここ10年ほどの間に、HIVを取り巻く環境は目まぐるしく変わった。そして、今も治療法や社会環境をめぐる、状況はぐるぐると変化している。講演を通し、HIV・エイズはとてはやこしい感染症だということを改めて感じ、不安になったりもした。一方で、そんな状況に対し解決の糸口を見つけようと努力する、団体や医者、研究者の姿を目の前で拝見し、頼もしくもあり、陽性者たちも他人任せに甘えるだけではないと実感した。

学会に出席し、特に面白かったのが、普段出会えないいろいろな立場のHIV・エイズ関係者に出会えたことだった。陽性者をただ単純に社会の中の一集団として研究している研究者やメーカーの人など、客観的な話をする方々、現場の立場で意見を述べる医者や支援団体の方々…。当り前のことではあるが、皆それぞれに見解も違う。そんな多様な価値観の集

結した場所で、3日間過ごすことができ、陽性者という視点で見たときの自分の位置やそれぞれの社会からの見え方を、なんとなくではあるが感じることができ、今後何らかの活動をし、生きていく上でとても刺激になった。

現在、日本国内の感染者数は先進国の中では珍しく増え続けている。と同時に、徐々にではあるが医療従事者や支援者の数も増えている。その分、会場には知らない人ばかりがいるのだと思っていたが、会場で見かけた人々の中に知っている顔を何人も見つけ、人数が増えたといっても、まだまだ狭い世界の話なのだと感じた。毎年出席している人に、果たして、年々講演内容や出席者の顔ぶれがどのようにかわってきているのか、顔ぶれやその傾向について話を聞いてみたいと思った。

「時にはゆっくり考える時間が必要です。」

大阪医療センター 医療ソーシャルワーカー 岡本 学
第21回日本エイズ学会学術集會に参加させていただきました。

検査・相談、カウンセリング、薬物中毒、陽性者支援、チーム医療などなど、いろんなテーマのセッションに参加しましたが、今回は特に興味深かった検査・相談についてご報告させていただきます。

早期に診断をすること、重篤な免疫不全状態になる前に受診し治療を受けることが大きな目標になっています。陽性結果を本人に伝えた後、医療機関につなぐことが大切であり、結果をお知らせし、本人同意があれば、拠点病院の看護師にその場で電話をして、受診の方法などについて直接やり取りをする取り組みを始めた地域や、検査場スタッフが当日付き添って受診をするという報告がみられました。

同時に、受診をすることは大切なことだけれど、受診をするかどうか、いつ受診をするかどうかを自己決定すること、そのプロセスを支援することこそが大切だという声もありました。

陰性結果をスタッフがともに喜ぶことで、そこから予防につながる会話が生まれるという報告もありましたが、「陰性 = 良い事」としてしまうと、同時に「陽性 = 悪い事」との認識が生まれるのではないかと個人的には心配しています。その人自身の価値観は大切にすけれど、スタッフ側が価値判断をしないことが適切だと考えています。

検査件数をどう増やすのかという話になりがちなか中、検査・相談についてのシンポジウムの中で、長野県の佐久総合病院の高山先生は、感染がわかった後の医療や生活が保障されなければ、検査機会だけを増やしても検査は受けられないんだということを、オーバーステイの外国人を例に挙げて訴えていらっしゃいました。

「どうしようもない」ではなく、「どうにかしないといけないんだ」と訴え、自分にできることを実践されている方を目の前にすると、とてもパワーをもらったように思いました。

また、感染を知らされた時に嫌な対応をされたことより、早くわかることのメリットの方が大きいという意見も聞きましたが、メリット・デメリットは何でも客観的にできるものではなく（特に個人にとっては）とても主観的なものであり、だからこそ自己決定することが必要なんだという考えが強くなりました。

学会開催に合わせて行われた若手研究者と地域ボランティアのシンポジウムと、Living Togetherのリーディングにも参加させていただき、多くの方と意見交換ができたこともとても嬉しく思っています。

心残りとしては、あまりにも予定を詰め込みすぎたために、広島らしい食べ物は2日目の昼過ぎに食べた広島焼きと帰りの新幹線で食べた穴子飯だけということでしょうか。

最後に、毎日をバタバタと過ごしてしまい、ゆっくり考えたり学んだりする時間を持っていないことを反省しました。今回得たことをこれからにつなげていきたいと思えます。

活動報告他(2007年10~12月)

各部門より

ホットライン

エイズ電話相談（ふれいす東京および東京都委託）

ホットライン・ミーティング他活動状況（ ）内は出席人数
10月 2日 東京都ボランティア講習会（7名）
12日 東京都電話相談連絡会（2名）
13日 HL部門研修 / オリエンテーション（8名）
14日 HL部門研修 [第1日]（16名）世話人会（7名）
21日 スタッフミーティング（17名）

有志昼食会（13名）
第2回・新マニュアルプロジェクト（4名）
28日 HL部門研修 [第2日]（13名）
11月 9日 東京都電話相談連絡会（2名）
18日 世話人会（7名）スタッフミーティング（17名）
有志昼食会（7名）
12月 13日 東京都電話相談連絡会（2名）
16日 第3回・新マニュアルプロジェクト（4名）
22日 スタッフミーティング（21名）
28日 HL電話相談 / 仕事納め

相談実績報告

ふれいす東京エイズ電話相談

	10月	11月	12月
日数(日)	4	4	4
総時間(時間)	16	16	16
相談員数(延べ人)	4.5	4.0	4.5
相談件数(件)	33	40	39
うち(男性)	32	34	32
(女性)	1	6	7
(不明)	0	0	0
(陽性者)	0	0	0
1日平均(件)	11.0	10.0	9.8

東京都夜間・休日エイズ電話相談 (委託)

	10月	11月	12月
日数(日)	12	12	10
総時間(時間)	36	36	30
相談員数(のべ人)	25.5	25.0	22.5
相談件数(件)	250	223	234
うち(男性)	176	170	174
(女性)	73	53	60
(不明)	1	0	0
(陽性者)	1	0	0
1日平均(件)	20.8	18.6	23.4

11月の相談件数が少なめでしたが、1日平均はほぼ20件前後で推移しました。不安障害領域と思われる方からの相談は、毎月一定数ありますが、12月は特に多く感じました。世界エイズデー近辺は、マスコミの露出も増える時期ですので影響が出たのかもしれませんが。例年ですと検査の相談が増える時期ですが、今年は大きな増加はみられませんでした。新人研修の季節、ホットラインへの新しい空気を吹き込んでくれると期待しています。

(報告:佐藤)



ユースぶ PEP 活動内容

メンバー状況(12月現在)

女9名 男3名 計12名

ユースぶ PEP ミーティング他活動状況()内は出席人数

- 10月 13日 定例ミーティング@池袋(6名)
- 11月 2日 WEB ミーティング@新宿(2名)
- 12月 5日 WEB ミーティング@有楽町(2名)
- 13日 定例ミーティング@新宿(4名)

wAds イベント()内は出席人数

- 10月 21日 オープニングイベント@ cafe studio(5名)
- 11月 17日 多摩府中街頭キャンペーン@吉祥寺(3名)
- 21日 イベント参加@阿佐ヶ谷(1名)
- 22日 イベント参加@阿佐ヶ谷(1名)
- 28日 Love To Live ブース出展@台場(3名)
- 12月 1日 国際シンポジウム@ JICA 地球ひろば(2名)
- 1日 SHIBUYA RED-ハチ公前街頭キャンペーン(1名)
- 1日 SHIBUYA RED-RED WALK(1名)
- 1日 SHIBUYA RED-「CHOICE!」@ CLUB asia(2名)

2日 街頭キャンペーン@福島県郡山駅前(1名)

3日 東京都シンポジウム@新宿(3名)

wAds 事務局ミーティング

- 10月 24日(2名) 31日(6名)
- 11月 7日(3名) 9日(3名) 14日(4名) 26日(2名) 27日(3名)
- 12月 5日(4名) 7日(1名) 12日(2名)

wAds (World AIDS Day Series) 2007 キャンペーン無事終了!

10月21日に始まったwAds (World AIDS Day Series)

2007 キャンペーンは、12月25日をもって無事終了しました。今年はぶ PEPも参加団体として登録し、運営事務局員として、またイベント当日ボランティアとして精力的に活動しました。写真はぶ PEPが参加したイベントの一部、多摩府中保健所主催の吉祥寺街頭キャンペーンと、12月1日に行われたwAds 事務局主催のイベント「SHIBUYA RED (シブヤレッド)」の様子です。SHIBUYA REDとは、渋谷ハチ公前街頭イベント、Red Walk(宮下公園を起点に渋谷を回ったパレード)、「CHOICE!」(asiaでのクラブイベント)を同日、ほぼ同時に行った企画です。「レッド」リボンにも反映されている「赤」をとって、「12月1日、渋谷が赤く染まる!」をキーワードに展開しました。



吉祥寺街頭キャンペーン



Red Walk "渋谷が赤く染まる"

wAds とは...

12月1日の世界エイズデーに合わせて、約2ヶ月間にわたり実施されるHIV/AIDS全国意識喚起キャンペーンです。全国で若者が行っているHIV/AIDSに関連するイベントを1つのキャンペーンとして実施することで、社会的インパクトを創出し、若者に対する意識喚起を行うことを目的としています。また、同じ問題に取り組む若者同士が連携することにより、より大きな社会的インパクトの創出だけでなく、資材・人材・ノウハウ不足という、活動するにあたっての現状を改善する機会としての役割も果たしています。運営事務局員は、各ユース団体にそれぞれ所属している若者の有志により構成されています。2007年度は、「CHOICE(選択)」をテーマに、約10団体が参加、全国で30イベントが期間中に開催されました。

連絡先 info@wadsjapan.net

URL http://www.wadsjapan.net/

まとめ

人数不足などにより、一時活動が下火になっていたが PEPですが、9月に研修を終えた新メンバーが多く加わり、再び活動が活発になってきました。今後は、1月から3月に行うふぉー・ていーのワークショップ企画が3つ、セクシュアルヘルスウェブサイトの更新、2月に予定されている東京シュール葛飾中学校でのピアプログラムの見学、また、wAds 活動報告やアンケート集計などの事務局の仕事等々、盛りだくさんに予定されています。

ぶ PEPはいつでも参加メンバーを募集しています。予防啓発活動に興味がある方は、ぜひぜひ連絡ください

(報告：じっつー)

大人ぶ PEP 活動内容

ミーティング他活動状況

- 10月 6日 セミナー「オトナの女的カラダとの上手な付き合い方」@ふぉー・てぃー
- 11月 17日 今後の大人ぶ PEPの活動についてのミーティング@ぶれいす事務所
(生島さん、池上さん、みず、ともこ、いみ)
- 17日 ふぉー・てぃー企画第2弾のミーティング@ふぉー・てぃー事務所
(中村美亜さん、みず、いみ)
- 12月 17日 ふぉー・てぃー企画第2弾のミーティング@新橋ジョナサン (みず、ともこ、いみ)

10月6日にふぉー・てぃーにて、セミナー「オトナの女的カラダとの上手な付き合い方」が開催されました。詳しくはP.6をご覧ください。

また、第2弾企画「オトナの女的 セックス・アサーティブ講座」(講師：中村美亜さん)を2008年1月19日(土)に実施。それに続く企画を、みず、ともこ、いみの3人で試行錯誤中。

(報告：いみ)

ボディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

ボディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜11:00～第3木曜18:30～)

10/3	3人	10/17	4人
11/1	3人	11/15	4人
12/6	4人	12/20	4人
その他個別のミーティング		10件	

利用者数

9カ所の病院に通院中、もしくは入院中の23名の方にのべ32名のボディスタッフを派遣

活動内容(2007年12月末現在)

派遣継続中	19件
在宅訪問	11件
病室訪問	4件
在宅の電話のみ	1件
派遣休止	3件

10月～12月の新規派遣依頼
2件

10月～12月の派遣終了
2件(ニーズの消失 1件、クライアントの死 1件)

10月～12月の派遣調整
9件

ボディの現場から

10月7日の10:00～17:00でボディ・ワークショップを行いました。去年と今年の合同研修の修了者合わせ15名の参加があり、修了後15名の登録がありました。皆様お疲れさまでした。また、ワークショップに参加できなかった方、個別研修

者を合わせると待機の方が4名となっています。新たなメンバーの協力を得ながら、今後の派遣の運営をしていきたいと思っています。なお、12月の時点で新人の2名が既に活動を始める予定になっています。

また、12月6日の19:30～21:30でボディ・フォローアップトレーニングを行いました。当日は参加者・スピーカー・進行を含めて15名の参加がありました。今回は「活動を続けるコツ」として、活動を長期に続けている3名のボディをスピーカーに迎え、活動を振り返ってもらいながら、クライアントとの関係性や、長く続けるにあたって心掛けていることなど、困ったことやその解決方法など、短い時間ではありましたが、それぞれのケースについて色々な話を伺いました。これから活動を始めるボディにとっても、継続中の方にとっても、とても有意義な時間が持てたと思います。

なお、ボランティア感謝会にて、ボディから九岡さん、荒木さん、花房さん、石崎さん、井口さんの5名に感謝状が送られました。長期にわたる活動、本当にありがとうございます！これからもよろしく願いいたします。(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)*ファシリテーターなど)	
10月	27日	235名	(9名)	(4名)
11月	24日	187名	(11名)	(6名)
12月	23日	176名	(13名)	(6名)

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

カフェ・ネスト

10月	5回	57名
11月	4回	32名
12月	4回	39名

ピア・グループ・ミーティング(PGM)

- ・新陽性者PGM第38期(参加者4名)
11/17 12/1 12/15
- ・陰性パートナー・ミーティング
10/13(3名) 11/10(2名) 12/8(1名)
- ・ミドル・ミーティング
10/13(9名) 11/10(11名) 12/8(12名)
- ・母親小ミーティング
10/12(3名)
- ・もめんの会
11/22(3名)

学習会/イベント

- ・10/23 “専門家と話そう”シリーズ第3回「開業医と話そう」
ゲスト：Dr.根岸昌功(ねぎし内科診療所)(参加者16名)
- ・10/15 ストレス・マネジメント講座2(参加者3名)
- ・11/12 ストレス・マネジメント講座3(参加者2名)
- ・12/1 ネスト庵「歳暮の茶会」(参加者8、ご亭主1)
- ・12/15 ネスト年末パーティ(参加者28名)

ミーティング(陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
10/24(5、5)

- ・新陽性者 PGM 事前打合せ
10/14(2, 1) 12/16(2, 2)
- ・web NEST 運営委員会
10/16(3, 2) 11/20(3, 2) 12/18(1, 2)
- ・ネスト世話人会 12/17(1, 3)

ネスト・ニュースレター

10/4 10月号発行、11/16 11月号発行、
12/7 12月号発行

学習会「開業医と話そう」開催

HIV 陽性者をとりまく専門家を招いて行われる学習会「専門家と話そう」シリーズ第3回は、長年都立駒込病院で HIV 診療をしてきて、2007年2月に HIV 診療のできるクリニック「ねぎし内科診療所」を開業した根岸医師をゲストにお迎えしました。当日の詳細は P.5 をご覧ください。

ネスト年末パーティ

毎年恒例となっているネスト年末パーティが12月15日に行われました。今回は参加者、スタッフ、カフェネストボランティア合わせて総勢35名でした。手作りの料理やデザートも並び、和やかで楽しい会となりました。



(報告: はらだ) ネスト年末パーティ... 今年はベランダも!

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

<http://gf.ptkyo.com>

Gay Friends for AIDS 電話相談

10月 10件(平均2.5件)
11月 8件(平均2.0件)
12月 9件(平均1.8件)

OURDAYS DIARY x DISHES

新宿二丁目のコミュニティセンターaktaと、同じく新宿二丁目のカフェ CoCoLo cafe で企画展を開催しました。イベント中、aktaには可能な限り説明役のスタッフを置き、また新宿二丁目の街頭では、開催期間中の週末に計4回のフライヤーアウトリーチを行いました。アウトリーチ中に近くのパースタッフの方から「店頭で置くのでまとまった数のフライヤーが欲しい」という嬉しい申し出もあつたりしました。

aktaでは2週間、CoCoLo cafeでは1ヶ月という長期間のイベントでしたが、陽性の人もそうでない人も一緒に同じテーマで日常を垣間見ることから、HIV が決して遠い存在ではないというメッセージを受け取っていただけたのではないかと思います。

イベント期間中お世話になったakta及びCoCoLo cafeのスタッフの皆様、DIARYの原稿作成やDISHESの撮影にご協力いただいた皆様など、ご協力いただいた全ての方に改めてこの場を借りて御礼申し上げます。イベントの詳細は4ページのイベントレポートをご覧ください。

(報告: sakura)

HIV陽性者への相談サービス

相談実績 2007年10～12月

2007年	10月	11月	12月
電話による相談	58	32	69
対面による相談	35	29	32
E-mailによる相談等	99	75	60
うち新規相談	10	13	15

メール新規は含まず

10～12月の新規相談者の属性(N=38)

陽性者: 22人(男性: 22 女性: 0)
パートナー(元): 5人(男性: 5 女性: 0)
家族: 4人(男性: 2 女性: 2)
専門家: 6人(男性: 3 女性: 3)
その他: 1人(男性: 1 女性: 0)

10～12月新規相談者の情報源(N=38)

WEB(携帯含): 14
検査所/保健所: 2
陽性者の知人: 6
医療従事者: 4
以前から知っていた: 4
電話相談: 2
NPO: 2
行政職員: 1
本・パンフレット: 1
職場の上司: 1
不明: 1

10～12月の新規相談内容

【ミーティング/ネスト利用等】

- ・東海地方。ネスト利用をしてみたい。カウンセラーから紹介された。
- ・地方在住パートナー。混乱しているので同じ立場のミーティングに参加したい。
- ・「開業医と話そう」に参加したい。他の病気がきっかけで感染が判明した。
- ・感染がわかって1～2年経過しており通院中。カフェネストにいつてみたい。
- ・保健所からPGMを紹介された。
- ・地方の病院に通院中。他の陽性者の紹介でネストに来てみた。

【検査や告知】

- ・体調不良があり検査を受けたら陽性だった。
- ・肺炎で入院中に告知を受けた。近日中に転院予定。病院の情報が欲しい。
- ・定期的に検査をうけていて、今回も大丈夫だと思ったのだが陽性だった。

【人間関係】

- ・恋愛で日常生活に支障がでている。
- ・身近な人が拘留中。自分に何ができるだろうか。
- ・東海地方。息子の感染が判明。一般病院で入手したパンフが理解に役だった。
- ・元カレと一緒に検査にいったら二人とも陽性だった。
- ・彼氏の感染がわかったが、彼のプライバシーなので、話せずに悩んでいた。

- ・既婚者。2週間まえに保健所でわかった。家族にどう伝えるのかで悩んでいる。
- ・自分は扶養家族なので健康保険を使うと親にばれないか心配。

【医療など】

- ・一般のクリニックで検査をうけて告知を受けた。病院選択について相談したい。
- ・主治医との相性がいまいちで、医学的な判断を信じていいの不安。
- ・入院中、医療従事者とのコミュニケーションが大変。どうしたらいいか。
- ・東海在住で入院中。他科の医師の対応がいやそうに接している感じがする。
- ・一時は大変だったが、今はリハビリで体調がかなり回復した。

【生活や福祉】

- ・年齢をかさねていくと、自分に入れる生命保険があるかが気になる。
- ・ボランティア派遣について知りたい。身体に障害がある。
- ・自分はアジアからの留学生。今後のことをいろいろ知りたい。

【メンタル】

- ・メンタル面の状況が悪化し、失業状態に。過去の人間関係との交流も今は希薄。

【就労】

- ・娘の感染が判明した母親からの電話相談。就職時のプライバシーは。
- ・関西在住。福祉関連の仕事をしており、職場に通知するべきかを検討中。
- ・感染が判明したことを職場に伝えたら、自宅待機を命じられた。
- ・就職について相談にのってほしい。

【専門家】

- ・MSW 入院中の患者さんのことで相談。
- ・訪問看護 在宅を支援中。家族が疲れている。短期入院先の候補について。
- ・MSW 外国人への対応について情報が欲しい。
- ・ヘルパー 介護中の家族が燃え尽き状態。家族会はないか。
- ・医師 告知の仕方について相談にのって欲しい。

(報告: 牧原 / 福原 / 生島)

研究部門

厚生労働省 厚生労働科学研究

「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」(2006年度から)

大阪府立大学の東優子さんが主任研究者となって行われている研究で、今年度もぶれいす東京のメンバーが研究に協力しています。

編集後記

- ・今年は2月上旬に確定申告書類を作成できてスッキリ！自分へのご褒美ということで、お祝いに野菜スイーツ買いました。甘さ脂肪分控えめで美味しかったです (こんどう)
- ・窓の外に梅の花が咲いています。毎年この時季に生命力を感じさせてくれます。たくましいですね。(やじま)
- ・雪が融けるスピードが、東京都心とすこし離れた私が住む場所では、かなり違う。片道1時間弱の距離なのに、気温も数度違う。ああ、春が待ち遠しい。(いくしま)

(財)エイズ予防財団 研究成果発表会

「予防啓発のための『しかけ』の開発」

11月22日(木)18時から、都内新宿区の「ねぎし内科診療所」ホールにて開催されました。

2006年度に大阪府立大の東優子さんを主任研究者とする研究班にて、出版社の小学館とタイアップし



成果発表会で発表する徐さん。

て行なった性産業を利用する成人男性を対象とする調査の報告(発表者 新潟県立看護大学 徐淑子さん)及び、2000～2005年度に池上を主任研究者とする6年間の厚労科学研究成果を通じ生まれた、HIV/AIDSの予防とケアを結びつける「しかけ」の実践例の報告(発表者 池上及び生島)の2本立ての内容で発表が行なわれました。

平日の夕刻という時間帯ではありませんでしたが、計40名以上の来場者に研究班の活動内容とそれを通じた「Living Together」のメッセージを伝える機会を得、来場者アンケートにおいても好評価を戴きました。(報告:吉田)

エイズ予防財団 エイズ予防のための戦略研究

「首都圏および阪神圏の男性同性愛者を対象としたエイズ予防のための戦略研究」(分担研究者:市川誠一)

首都圏グループには、ぶれいす東京から引続き、生島、砂川、矢島、岩橋他がこのプロジェクトに参加しています。特に相談体制構築を委託されています。10月からは関西サポートラインが相談を開始しました。また、来年度からは東京地区でも同様の取組みを開始することについて、検討中です。告知直後のHIV陽性者にサポートを提供すると同時に、告知を受けた当事者の評価情報を収集し、検査環境を改善することを目指しています。

首都圏グループ

「HIVマップ」2007年8月オープン

<http://www.hiv-map.net/>

HIVについて知りたい時、悩んでいる時。このサイトは一人ひとりが自分なりの現実に向き合うことを応援します。

関西グループ

「陽性者サポートライン関西」2007年10月スタート

このラインは、陽性とわかって間もない人のための電話相談です。HIV陽性者の相談支援経験が豊富な相談員が対応しています。

水曜日 19:00-21:00

06-6358-0638

(報告:生島)

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぶれいす東京
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス204
TEL: 03-3361-8964 (月-金 12:00～19:00)
FAX: 03-3361-8835
E-mail: info@ptokyo.com
ぶれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>
Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>
web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com/>
Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>